



Title	連結強度の違いが部分床義歯ならびに欠損隣接歯の長期予後に与える影響の検討 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	今田, 瑠偉
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(歯学)
Dissertation Number	甲第15653号
Issue Date	2023-09-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/91018
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Rui_Imada_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称 博士（歯学） 氏名 今田 瑠偉

学位論文題名
連結強度の違いが部分床義歯ならびに
欠損隣接歯の長期予後に与える影響の検討

キーワード（5つ） 連結強度，テレスコープ義歯，クラスプ義歯，欠損隣接歯，生存率

本研究では補綴装置の予後および欠損隣接歯の予後について、連結強度（義歯と支台歯の間に設定した支台装置部分の変位性）の違いによる差はないという帰無仮説を立て、15年にわたる長期の観察期間のもと、連結強度が義歯および支台歯の生存率とトラブル未発生率に与える影響について検討した。

2003年10月から2020年12月までの間に北海道大学病院義歯科を受診し、部分床義歯にて補綴した患者を対象とした。本研究の研究デザインは後ろ向きコホート研究で、対象患者のうち選択基準を満たし除外基準に該当しなかった患者の診療録から、研究対象者の基本情報、残存歯、補綴装置の情報を収集した。欠損隣接歯において支台装置の種類から、T義歯の欠損隣接歯は T-teeth, R-Clasp 義歯は R-teeth, C-Clasp 義歯は C-teeth に分類した。観察期間の開始時期は最終補綴装置の装着された時点とした。補綴装置のエンドポイントは義歯の新製に着手した日または修理された時点とした。新製または修理の原因については、義歯床、支台装置、連結子、人工歯、支台歯に分類して情報を収集した。欠損隣接歯のエンドポイントとしては、欠損隣接歯の喪失もしくはトラブルの発生としてその原

因について情報を収集した。トラブルについては、う蝕、歯周疾患、根尖性歯周炎、歯根破折、修復物の脱離・破損などにより何らかの処置を受けた時点とした。エンドポイントとなる事象の発生がなかった場合には、観察期間の終了は2021年4月以前の最終受診日もしくは観察開始から180か月のいずれか短い時点において打ち切りとした。

統計解析は、部分床義歯および欠損隣接歯の生存率およびトラブル未発生率をそれぞれKaplan-Meier法を用いて、支台装置の種類ごとに生存時間曲線を作成した。連結強度の異なる支台装置の種類ごとの比較にはLog-Rank検定を行い、有意水準は0.05とした。また、部分床義歯と欠損隣接歯の予後に影響を与える因子を検討するため、多変量解析としてCox比例ハザード分析を行った。解析ソフトウェアはJMP® PRO 16.2.0 (SAS Institute Inc., Cary, NC, USA)を用いた。なお、本研究は北海道大学病院生命・医学系研究倫理審査委員会の承認と実施医療機関の許可のもと実施した(生021-0077)。

2003年10月から2020年12月までの間の研究対象患者は631名(男性188名、女性443名)、平均年齢 66 ± 10.2 歳であった。補綴装置の総数は1427床、T義歯は74床、R-Clasp義歯は254床、C-Clasp義歯は1099床であった。欠損隣接歯は、総数が2079本、T-teethが206本、R-teethが443本、C-teethが1430本であった。

補綴装置の生存率は、T義歯が84%、R-Clasp義歯が66%、C-Clasp義歯が34%であり、統計学的な有意差が認められた($p<0.001$)。一方、補綴装置のトラブル未発生率は、T義歯が14%、R-Clasp義歯が12%、C-Clasp義歯が16%であり、統計学的な有意差は認められなかった($p=0.325$)。

欠損隣接歯の生存率は、T-teethで92%、R-teethで72%、C-teethで86%であり、統計的有意差は認められなかった($p=0.097$)。一方、欠損隣接歯のトラブル未発生率は、T-teethで59%、R-teethで60%、C-teethで52%であり、統計学的な有意差が認められた($p=0.015$)。

多変量解析について、補綴装置の再製の有意なリスク因子は、男性、C-Clasp義歯、Kennedy II級であった。補綴装置のトラブルの有意なリスク因子はKennedy I級であった。

欠損隣接歯喪失の有意なリスク因子は Eichner 分類 B3-C2 であること、歯内療法がされていること、欠損隣接歯の対合歯が無いことであった。欠損隣接歯トラブルの有意なリスク因子は上顎、臼歯、T 義歯、Kennedy I 級、最欠損隣接歯の補綴装置が部分被覆冠、欠損隣接歯の補綴装置が連結されていることであった。

以上から、部分床義歯、欠損隣接歯いずれについても帰無仮説が一部棄却された。

本研究の結果から、連結強度の違いは、部分床義歯の生存率に影響を与えるが、トラブル発生率には影響を与えないこと、さらに、連結強度の違いは、欠損隣接歯の生存率には影響を与えないが、トラブル発生率には影響を与えることが明らかとなった。

(1554 文字)